

60歳から
こう生きよう!

光武 賢一郎

60歳からこつ生きよう！——もくじ

1 あれから40年、よく来れたね、60歳まで……………1

① お父さん、ごくろうさんでした……………2

② 人は時代を選べないんだよね……………4

③ むしろあなたは良かったほう……………6

2 まわりはどうだか、わかってる？……………9

① 人間、そんなに急に変わるもんじゃないんだけど……………10

② オヤジの権威はどこいった……………11

③ まわりはこんな状況にあるんですよ……………13

3 そしてあなたは……………19

① あなたのまわりのこと……………20

② あなた自身のこと……………22

③ オカネは？……………24

4 自分の人生だよ……………27

① お友達のこと……………28

② ダテじゃない、40年の年季……………30

近頃、日本製品が礼賛されるのをよく見聞きする。私たち現在60歳を越えた団塊の世代が少年時代だった頃、日本製品は「安かるう、悪かるう」などと日本人自身も認識していた。その頃の品物は多くが、今の一部の発展途上国などで見られる粗悪品やニセモノの代名詞だったのだ。それがその後、カメラ、トランジスタラジオなどに始まり、家電製品、車に至るまで、その優秀さで世界を席卷してきた。

しかし、日本製品は単なる日本の経済力が産み出したものかといえば、それだけではないだろう。この国の地理的位置、独特の風土、そこで育まれた日本人の性質に負うところも大きい。すなわち、歴史的に鎖国的状態の時代が長く続いたこと、四季に富む気候環境、農業を基盤とした勤勉な人の性格などである。また、「そうしなきや、戦後の日本人は食えなかつたんだから」と端的に言うことも出来よう。そして、この日本製品礼賛の風潮は今や極に達しているといってもよい。日本人も次第にそのことに自信を持つようになつてきている。

ところがである。ドイツ人は2ヶ月くらの休暇を取るのはごく普通。そして、完全に仕事から離れ家族と共に過ごす。こんな話を聞くと私は日本製品礼賛の気持ちが悪えてしまうのだ。何故なの？ これまでの60年間の人生を振り返ると、世界から礼賛されるような製品を作り続けたことより、家族とのんびり過ごせるようなドイツ人並みの毎年2ヶ月の夏休みの方が欲し



1

あれから 40 年、
よく来れたね、60 歳まで

① お父さん、ごころうさんでした

「あれから40年!」、中高年に人気の高い漫談家綾小路きみまろ氏のセリフではないが、1970年代初めに20歳前後で就職した人たちが、あれから40年、2010年迄に一応定年を向かえた。いわゆる団塊の世代と言われる人たちが60歳に達した。還暦である。その真只中にいる私も含めて、皆さんに「本当にごころうさんでした」と言いたい。もちろん、定年のない結構な仕事に従事しておられる方、第二の人生として新しい職場で頑張っておられる方も多いだろう。

あの時代、戦後のベビーブームに生まれた私たちは受験を始め、就職、住宅取得、子供の教育、昇進など全てが高倍率で他人との競争だった。それらをなんとか生き抜いて現在の60歳までこれた。気がつけば、今のところまだ自分の身体も元気だし、オレんちも家族もまあまあといるところか。あと残っていることといえば、自分の入る墓所取得にまたぞろ他人との競争をしなければならぬのだろうか。「あゝあ」、とため息も出るが……。

ひところ「亭主元気で留守がいい」などと、やるせないことをいわれようと、家族のために「給料運搬人」に徹してきたあなた。そのことは、他人から見えないところで、あるいは、空気のようにそのありがたみを意識されなくても、黙々と自分以外の人のために貢献するという

中
略



7

そしていろいろ
見えてくる

① やりたいことのストック

今、私の携帯のメモ欄は家事などの週間予定とやりたいことのストックで一杯だ。

――【例1】――

もしも海外旅行に行けるのなら、昔30代の頃に2年間ほどお世話になったアメリカ東海岸。家族と住んでいたアパートやタウンハウスが今どうなっているか見てみたい。もう一度ハイウェイを車でとばしてみたい。あの頃の友人にも会ってみたい。おっと、他にもメモってある。当時唯一見逃した、ニューヨーク州北部のクーパーズタウンまで足をのばしてメジャーリーグの野球殿堂を訪ねることだ。球聖テッド・ウイリアムズのバットつて一体どんなだろう？それから当地の名物のカニやカキも食べなきゃ。

山歩きが好きな私としてはスイス・イタリアアルプスのトレッキングはどうしてもしてみたい。一度近くまで行ったことがあるが、そのときは10月というのに吹雪で周囲は真っ白け、何にも見えなかった。必ずこのお礼参りをしなきゃ。それから、いつかテレビで見たニュージーランド南島のミルフォードサウンド国立公園。氷河と一体となった雄大な山や草原や湖

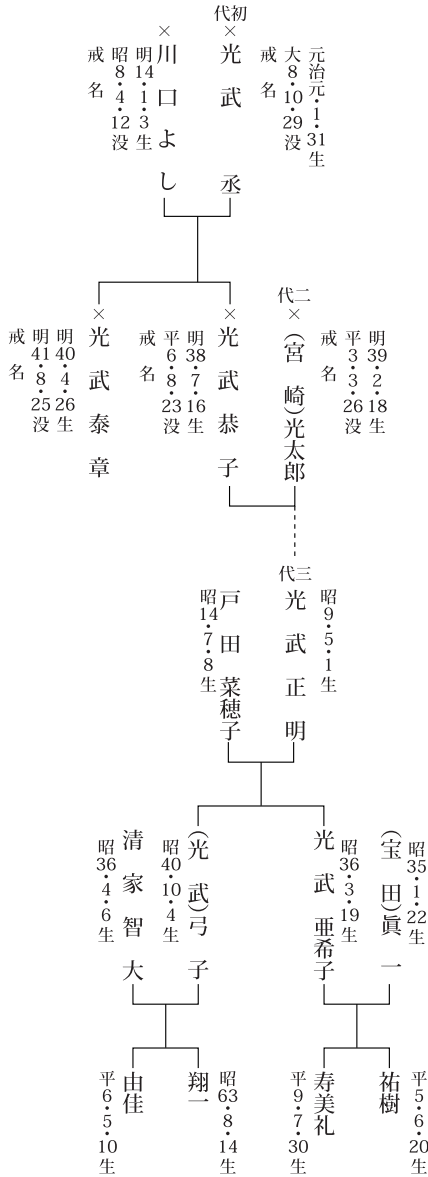
実はこの本を書き終わつた後、二、三の大事件があつた。

一つは何といつても東北地方を中心に襲つた大震災だ。現在、この地方の方が私のこの本を読んで下さるとしても、特に被災者の方々にはとても賛同など得られまい。逆に私の方からその方々に言いたい。あなた方の今後の人生の使命は迷うことなく決まりましたね、と。そう、復興に全力を尽くすこと。本編でも述べていますように人は自分の生きた時代から受ける運命に逆らうことはできません。一つだけ私からあなたに言えるとしたら、復興の作業の中でもどうかあなたの創造力を發揮して下さい。こうしたらどうだろう、こりあイケルんじゃないか、と思いつくことはこれから山ほどあると思います。その一つ一つを大切に他の皆さんのアイデアともすり合わせて復興のためのすばらしいプランを創出し、実現して下さい。

この震災の影響は私にも多少の影響があつた。東北、北関東のみならず東京でも余震や停電、電車の間引きなどが実行され、関西に住む私は息子や友人が住む東京に行くことを制限されている。「そんなヒマがあつたら被災地にボランティアにでも行け」といった読者の声も聞こえてきそつだが、今のところ義捐金のカンパでご勘弁いただきたい。

もう一つは、この本でも紹介したボクシングの長谷川穂積選手が先日、WBC世界フェザー

光武家略系



【著者略歴】

1949年福岡県生まれ。大学卒業後、〇〇電器に入社、空調関連の技術系職務に従事。この間1982年から2年間米国商務省傘下の研究所に海外留学。1995年より同社の知的財産部門で勤務。1997年から10年間中国広東省、北京などで勤務。2006年退職。その後、2年間日本貿易振興機構(ジェトロ)知財部門のアドバイザーとして北京の弁護士事務所に勤務。上場企業からベンチャーまで、数多くの日本企業の中国進出に寄与する。